

健康調査票による看護学生の健康状況に関する追跡研究

大井美紀・松木悠紀雄・川井八重・岡田美幸

(看護学科)

Follow-up Study on Health Conditions of Nursing Students by Questionnaire Method

Miki OOI, Yukio MATSUKI, Yae KAWAI, Miyuki OKADA

Faculty of Nursing

Abstract. On nursing students in a public junior collage, we conducted a follow-up survey using questionnaire of modified CMI. We investigated health conditions on both students of three years course and two years course, from the entrance into college till around the end of clinical training, namely at the time before the graduation. And the survey was lasted for three terms.

From this investigation, many items of decreasing rates of complaints were shown with progress of school year. It suggested a possibility of stressful period after entrance to school temporarily.

Some question items which rose the rate in a period only, or with progress of school year, were suggested too. As these items were different each other between three years course and two years course, it was suggested strongly that these changes of rate were affected by course curriculum in particular, not by aging.

はじめに

近年は教育課程として、関連職種に関して実地研修を課す大学が増えている。卒業後の就職直後に味わうストレスを学生時代に予め経験することになるが、看護学生における臨床実習にあってはその期間は1年から半年と、他と比較にならないくらいに長い。社会福祉士等の養成課程においてもまた同様であるが、看護学生と比べると期間については圧倒的な相違がある。

看護学生が臨床実習を行うにあたってかなりのストレスがかかると言われている¹⁾。これは

長期間にわたる医療という場の中での実習であることの特异性に加え、業務とレポート等による心身の多忙さ、患者への接触と人間的交流とがまず業務の要となる¹⁾という看護そのものへの適応、医療チームという集団に起因する集団力学からのストレス等種々のものが考えられる。また看護教育としての養成課程そのものに余裕がない、あるいは高等教育と精神保健問題との関連を指摘する議論もある^{2), 3)}。

本研究は健康調査票（修正 CMI）を用いて看護学生の健康状況を追跡し、学年進行に従って健康にどのような変化を生じているか検討し、合わせて臨床実習を含め学業から実際に何らかのストレスを受けた兆候が認められるかどうか、あるいは看護教育の過程と健康状況に関する愁訴を対照させて両者の関係について検討を加えることを目的としたものである。

対 象

看護学生に対して、入学時から臨床実習後期（卒業3か月前）まで健康調査票を用いて逐次健康状況を追跡することとした。ひとつのクラスの追跡は入学から卒業までの長期にわたるため、調査のための便宜が図られた某公立短期大学における看護学生のみを対象とした。

同短期大学には2年課程と3年課程の2学科があり、いずれも50名を定員とする。複数回の追跡調査を考えるとかなりの数の脱落が想定されるため、両課程とも3期生にわたって調査することとし、したがって全員が追跡される場合は両課程で各150名が追跡されることになる。調査時点の選定は、まず入学後の4～5月に第1回目を実施し、2年生に進級した場合の同時期に第2回目の調査を行う。3年課程では3年生に進級した場合の同時期にさらに3回目の調査を行う。臨床実習は2年課程では2年後期に、3年課程では3年前期から後期にわたって行われるため、実習後期に最後の調査をすることとして、12月後半に実施することとした。したがって2年課程では3回、3年課程では4回の調査が行われることになる。これらを3期にわたって繰り返したので、合計5年間にわたる調査となった。

調査時点は、授業時間の前後や学生を集合させる機会を利用して行われ、原則としてその場で配布し記入させた。ただし実習後期に行う最後の調査は、学生がそれぞれ分散して各病院・各病棟に出ているため、調査機会を見いだすのが非常に困難であった。したがって集合の機会が無い場合は工夫して調査票を配布し後日提出させるなどの工夫を行った。

方 法

健康調査票は、普及度が高く、適用範囲が広いとされる CMI（コーネル医学指数）^{4)~10)}を用いることとした。CMIは195項目に及ぶ質問項目からなるが^{11), 12)}、これに表1に示した11項目を加えた修正 CMI を今回は利用した。

本研究で対象としたデータは、すべての調査（3年課程においては4回、2年課程においては3回）に対して回答したものに限定した。したがって該当者は4調査分、あるいは3調査分のデータを完備したものである。

表1 CMIに加えた健康調査項目

| CMI 番号 | 分類 | 質問内容 |
|--------|----|--------------------|
| 5a | A | よく目がかすむ |
| 16a | B | よく喉が痛んだり扁桃腺がはれたりする |
| 32a | C | ときどき脈が乱れる |
| 48a | D | 吐き気があったり吐いたりする |
| 50a | D | 胸やけやこみあげがある |
| 56a | D | 食後や空腹時に胃が痛む |
| 65a | E | 肩や首すじがよく凝る |
| 69a | E | いつも足がだるい |
| 72a | F | ときどき皮下出血がおこる |
| 97a | H | 月経が不順である |
| 100a | H | 月経期以外に出血がある |

(参考)

| 分類 | 質問内容 |
|----|--------|
| A | 眼と耳 |
| B | 呼吸器 |
| C | 心臓血管系 |
| D | 消化器 |
| E | 筋肉骨格系 |
| F | 皮膚 |
| G | 神経系 |
| H | 生殖泌尿器系 |
| I | 疲労度 |
| J | 疾病の頻度 |
| K | 種々の疾病 |
| L | 習慣 |
| M | 不適 |
| N | 抑鬱 |
| O | 不安 |
| P | 敏感 |
| Q | 憤怒 |
| R | 緊張 |

解析は、3年課程・2年課程それぞれについて、項目別の回答で学年進行に伴う変化の有無に関して検討することを主たる視点とした。したがって学年進行に伴う各調査毎に、期別を区分せず合併させて同じ調査学年からなるひとつのグループとしてまとめ、合併グループでの調査時期別の回答に関して統計的比較を実施することとした。具体的には、グループ間の比較に関しては順位によるクラスカル・ウォリスの検定を行い、学年進行に伴うそれぞれの個別グループ間の差の有無については一元分散分析における多重比較を行った。多重比較にはいくつかの方法があるが、ここでは最も単純2グループづつを比較する最小有意差法を用いており、限界危険率は5%のみとした。ただし全集団における入学時・卒業時（臨床実習後期）の愁訴回答の高さ、及び両時点での変化を見るため、単純比較も合わせて実施した。

結 果

完全に追跡を完了した学生数は、表2に示したとおりである。追跡開始時期の異なる課程別の3集団を合わせて3年課程では合計83、2年課程では合計112（合計195）が今回の追跡集団である。またこの集団の追跡開始時の年齢分布は表3に示したとおりであり、18歳と19歳とで全体の約96%を占めた。

表2 各集団の追跡完了数

| 開始時期 | 3年課程 | 2年課程 |
|------|------|------|
| A | 15 | 32 |
| B | 37 | 36 |
| C | 312 | 44 |
| 合計 | 83 | 112 |

表3 追跡集団の開始時年齢分布

| 年齢(歳) | 3年課程 | 2年課程 |
|-------|------|------|
| 18 | 72 | 92 |
| 19 | 10 | 13 |
| 20 | 1 | 2 |
| 21-22 | - | 3 |
| 23-25 | - | 1 |
| 26以上 | - | 1 |
| 合計 | 83 | 112 |

全集団での1年生入学直後の修正 CMI の回答で、10%以上の回答率を示した項目を表4-1に示した。眼鏡使用の項目は別として、「H.いつも月経痛がある」「E.肩や首すじがよく凝る」「D.よく間食をする」という項目は4割以上の割合を占め、「M.いつも相談相手がそばにいて欲しい」という項目が3割以上を占める。分類Hの項目(生殖泌尿器関連)は他に「H.月経時体の具合が悪い」「H.月経が不順である」が2割以上、「H.月経時に緊張したり神経質になる」「H.おりものが多い」が1割以上の回答割合であることが示された。また分類Mの項目(不適関連)ではほかに、「M.ものごとを急いでするときには頭が混乱する」「M.いつも決心がつかない」が2割以上、「M.試験や質問される時に汗をかいたり震える」「M.見知らぬ人や場所が気になる」が1割以上を占めた。分類D(消化器関連)の項目も、ほかに7項目が表中に示され、分類B(呼吸器関連)も5項目があげられている。表に示された40項目中、この4分類の該当項目数だけで23項目あり、表中の項目数の58%に該当する。

次に臨床実習後期(卒業3か月前)における調査で、追跡学生全員について10%以上の回答率を示した項目を表4-2に示した。ただしこのときの回答時期は3年課程では3年後期、2年課程では2年後期ということになる。入学時と比べて項目数では4項目の減(Rが2項目減、F、H、Pの各1項目減、Lの1項目増)であり、回答割合についても以下に述べる項目の外は、すべて回答割合が減少した。その中で特に減少の大きい項目は「M.いつも相談相手がそばにいて欲しい」16.8%減、「F.よく顔がほてって赤くなる」と「M.いつも決心がつかない」はいずれも10.8%減である。逆に回答割合が1%以上増加した項目は、「D.よく胃をこわす」7.6%増を筆頭に「H.月経が不順である」5.6%増、「H.月経時に緊張したり神経質になる」5.1%増、「I.疲れてよくぐったりする」2.6%増の4項目のみである。入学時同様、D、B、M、Hの4分類に属する項目数だけで22項目、表中の項目の61%を占めた。

表5にクラスカル・ウォリスによる検定結果及び多重比較の結果を合わせて示した。質問項目

表4-1 追跡集団の1年生全員による質問項目の回答割合 (0.10以上のもの)

| CMI 番号 | 分類 | 質問項目 | 回答割合 | 標準誤差 |
|--------|----|----------------------|-------|-------|
| 2 | A | 遠くのものを見るのに眼鏡がいる | 0.554 | 0.036 |
| 97 | H | いつも月経痛がある | 0.441 | 0.036 |
| 65 a | E | 肩や首すじがよく凝る | 0.436 | 0.036 |
| 46 | D | よく間食をする | 0.421 | 0.035 |
| 154 | M | いつも相談相手がそばにいて欲しい | 0.333 | 0.034 |
| 148 | M | ものごとを急いでするときには頭が混乱する | 0.251 | 0.031 |
| 165 | O | ささいなことが気になる | 0.251 | 0.031 |
| 78 | F | よく吹出物がでる | 0.246 | 0.031 |
| 74 | F | よく顔がほてって赤くなる | 0.241 | 0.031 |
| 153 | M | いつも決心がつかない | 0.236 | 0.030 |
| 98 | H | 月経時体の具合が悪い | 0.231 | 0.030 |
| 97 a | H | 月経が不順である | 0.221 | 0.030 |
| 19 | B | 冬になるとよく風邪をひいて嫌な思いをする | 0.215 | 0.030 |
| 17 | B | 風邪をひくと咳が続くことがよくある | 0.215 | 0.030 |
| 6 | A | よく目が赤くなる | 0.179 | 0.028 |
| 20 | B | 季節の変わりめによくひどい鼻風邪をひく | 0.179 | 0.028 |
| 49 | D | 食後いつもお腹が張る | 0.174 | 0.027 |
| 191 | R | 夜中に物音がするとおびえる | 0.169 | 0.027 |
| 108 | I | 疲れてよくぐったりする | 0.169 | 0.027 |
| 12 | B | くしゃみが多くて困ることがよくある | 0.169 | 0.027 |
| 141 | L | 毎日運動する余裕はない | 0.159 | 0.026 |
| 57 | D | よく下痢をする | 0.154 | 0.026 |
| 51 | D | よく胃の具合が悪い | 0.154 | 0.026 |
| 47 | D | 食事がひどく早い | 0.144 | 0.025 |
| 100 | H | 月経時に緊張したり神経質になる | 0.144 | 0.025 |
| 50 | D | 食後よくげっぷがでる | 0.144 | 0.025 |
| 145 | M | 試験や質問される時に汗をかいたり震える | 0.144 | 0.025 |
| 102 | H | おりものが多い | 0.138 | 0.025 |
| 16 a | B | よく喉が痛んだり扁桃腺がはれたりする | 0.133 | 0.024 |
| 179 | Q | 思い立ったらいつも気がせく | 0.133 | 0.024 |
| 60 | D | ひどい便秘がある | 0.133 | 0.024 |
| 1 | A | 新聞を読むのに眼鏡がいる | 0.128 | 0.024 |
| 159 | N | よく泣く | 0.123 | 0.024 |
| 175 | P | 人から批判されるといつも心を乱す | 0.123 | 0.024 |
| 72 | F | 皮膚が敏感でかぶれやすい | 0.123 | 0.024 |
| 134 | K | ふとりすぎている | 0.123 | 0.024 |
| 151 | M | 見知らぬ人や場所が気になる | 0.123 | 0.024 |
| 37 | C | 夏でも手足が冷える | 0.113 | 0.023 |
| 48 | D | よく胃をこわす | 0.103 | 0.022 |
| 190 | R | 怒鳴りつけられるとすくむ | 0.103 | 0.022 |

として34項目示してあるが、相互にそれぞれ該当しない項目があり、前者で18項目、後者で2項目が表を分離すれば記載の必要がないものである。

表4-2 実習後期における全員の回答割合 (0.10以上のもの)

| CMI 番号 | 分類 | 質 問 項 目 | 回 答 割 合 | 標 準 誤 差 |
|--------|----|----------------------|---------|---------|
| 2 | A | 遠くを見るのに眼鏡がいる | 0.487 | 0.036 |
| 46 | D | よく間食をする | 0.421 | 0.035 |
| 97 | H | いつも月経痛がある | 0.410 | 0.035 |
| 65 a | E | 肩や首すじがよく凝る | 0.354 | 0.034 |
| 97 a | H | 月経が不順である | 0.277 | 0.032 |
| 148 | M | ものごとを急いでするときには頭が混乱する | 0.205 | 0.029 |
| 108 | I | 疲れてよくぐったりする | 0.195 | 0.028 |
| 100 | H | 月経時に緊張したり神経質になる | 0.195 | 0.028 |
| 98 | H | 月経時体の具合が悪い | 0.195 | 0.028 |
| 78 | F | よく吹出物がでる | 0.185 | 0.028 |
| 48 | D | よく胃をこわす | 0.179 | 0.028 |
| 49 | D | 食後いつもお腹が張る | 0.179 | 0.028 |
| 51 | D | よく胃の具合が悪い | 0.174 | 0.027 |
| 19 | B | 冬になるとよく風邪をひいて嫌な思いをする | 0.174 | 0.027 |
| 154 | M | いつも相談相手がそばにいて欲しい | 0.164 | 0.027 |
| 165 | O | ささいなことが気になる | 0.159 | 0.026 |
| 20 | B | 季節の変わりめによくひどい鼻風邪をひく | 0.154 | 0.026 |
| 6 | A | よく目が赤くなる | 0.144 | 0.025 |
| 17 | B | 風邪をひくと咳が続くことがよくある | 0.144 | 0.025 |
| 145 | M | 試験や質問される時に汗をかいたり震える | 0.133 | 0.024 |
| 141 | L | 毎日運動する余裕はない | 0.133 | 0.024 |
| 74 | F | よく顔がほてって赤くなる | 0.133 | 0.024 |
| 57 | D | よく下痢をする | 0.133 | 0.024 |
| 47 | D | 食事がひどく早い | 0.133 | 0.024 |
| 159 | N | よく泣く | 0.128 | 0.024 |
| 153 | M | いつも決心がつかない | 0.128 | 0.024 |
| 60 | D | ひどい便秘がある | 0.123 | 0.024 |
| 152 | N | そばに知った人がいないとおどおどする | 0.118 | 0.023 |
| 16 a | B | よく喉が痛んだり扁桃腺がはれたりする | 0.118 | 0.023 |
| 143 | L | 毎日お茶やコーヒーをよく飲む | 0.113 | 0.023 |
| 1 | A | 新聞を読むのに眼鏡がいる | 0.113 | 0.023 |
| 12 | B | くしゃみが多くて困ることがよくある | 0.108 | 0.022 |
| 50 | D | 食後よくげっぷがでる | 0.108 | 0.022 |
| 134 | K | ふとりすぎている | 0.108 | 0.022 |
| 37 | C | 夏でも手足が冷える | 0.103 | 0.022 |
| 179 | Q | 思い立ったらいつも気がせく | 0.103 | 0.022 |

表5 クラスカル・ウォリスの検定および多重比較による検定結果

| CMI番号 | 分類 | 質問項目 | 統計的検定 | | 一元配置分散分析による多重比較(LSD法 p<0.05のみ) | | | | | | | | | | | | | |
|-------|----|--------------------|---------------|------|--------------------------------|-----|------|-----|------|------|-----|-----|------|------|--|--|--|--|
| | | | クラスカル・ウォリスの検定 | 学年比較 | 3年課程 | | | | 2年課程 | | | | 2年課程 | | | | | |
| | | | 3年課程 | 2年課程 | 1-2 | 1-3 | 1-3+ | 2-3 | 2-3+ | 3-3+ | F値率 | 1-2 | 1-2+ | 2-2+ | | | | |
| 4 | A | いつも瞬きしたり涙がでたりする | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 11 | B | よく喉がつかまるような感じがする | * | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 14 | B | しょっちゅう鼻水がでる | | * | | * | | | | | | | | | | | | |
| 15 | B | ときどきひどい鼻出血がある | | * | | * | | | | | | | | | | | | |
| 16a | B | よく喉が痛んだり扁桃腺がはれたりする | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 24 | B | ときどきひどい寝汗をかく | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 48 | D | よく胃をこわす | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 50 | D | 食後よくげっぷがでる | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 56 | D | 胃・十二指腸潰瘍にかかったことがある | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 64 | E | よく関節が痛んだり腫れたりする | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 72 | F | 皮膚が敏感がかぶれやすい | | * | | * | | | | | | | | | | | | |
| 73 | F | いつも切傷が治りにくい | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 74 | F | よく顔がほてって赤くなる | | * | | * | | | | | | | | | | | | |
| 75 | F | 冬でもひどく汗がでる | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 76 | F | 皮膚のひどい痒みがある | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 78 | F | よく吹出物がでる | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 97a | H | 月経が不順である | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 98 | H | 月経時体の具合が悪い | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 100a | H | 月経期以外に出血がある | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 101 | H | 急に体がかゆくなったり汗がでたりする | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 109 | I | 仕事で疲れすぎてしまう | | + | | | | | | | | | | | | | | |
| 117 | J | いつも体の具合が悪いほうだ | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 121 | J | 自分の健康のことがよく気になる | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 130 | K | 甲狀腺が腫れたことがある | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 140 | L | 毎日くつろぐ余裕がない | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 153 | M | いつも決心がつかない | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 154 | M | いつもそばに相談相手欲しい | | ** | | * | | | | | | | | | | | | |
| 163 | O | いつもよくよくする | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 174 | P | 感情を押しやすい | | + | | * | | | | | | | | | | | | |
| 175 | P | 人から批判されるといつも心を乱す | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 180 | Q | すぐかっとなったりイライラする | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 184 | Q | 人の言動が気に障ることがよくある | | | | * | | | | | | | | | | | | |
| 191 | R | 夜中に物音でおびえる | | * | | * | | | | | | | | | | | | |
| 192 | R | 怖い夢をよく目を覚ます | | + | | * | | | | | | | | | | | | |

(注) 表中の記号は次のとおりである。* p<0.01 ** p<0.05 + p<0.10

クラスカル・ウォリスの検定によれば、学年進行に伴う変化が統計的有意差として明示されたのは、3年課程では「A.いつも瞬きしたり涙が出たりする」「F.よく顔がほてって赤くなる」のみであり、2年課程では「M.いつもそばに相談相手が欲しい」（これのみ $p < 0.01$ ）のほか、「B.しょっちゅう鼻水がでる」「B.ときどきひどい鼻出血がある」「F.皮膚が敏感でかぶれやすい」「R.夜中に物音でおびえる」の項目であった。項目数として合計7項目と少ないうに、課程毎に該当項目が全く異なるという結果となった。

多重比較については、本来的に一元配置分散分析によるものであるからそのF確率をまず示した。その結果はクラスカル・ウォリスの検定結果とほとんど一致するが、2年課程「R.夜中に物音でおびえる」のみが相違した。

続いて学年間比較として、2つずつのグループの組合せで統計的有意差の示される項目について示した。方法の項でも述べたように、この比較は当初から限界危険率5%のみをとってある。表5の中で、各学年当初における調査はそれぞれ1, 2, 3で表し、臨床実習後期における調査は3+, 2+として表した。

3年課程では、1-2間では3項目（分類と項目数で示すと H2, D1。以下同じ。）、2-3間で3項目（D1, E1, F1）に差が示されるが、3-3+間では差のある項目は示されなかった。1-3間で8項目（A1, B1, F1, H1, J1, L1, M1, Q1）、1-3+間で6項目（A1, D1, F1, H1, M1, P1）、2-3+間で1項目（E1）の合計21項目に差が示された。合計6グループ間比較のうち2以上の比較で差が示されたのは「A.いつも瞬きしたり涙がでたりする」「D.食後よくげっぷがでる」「E.よく関節が痛んだり腫れたりする」「F.よく顔がほてって赤くなる」「H.月経が不順である」の項目であった。差が示された項目の分類毎の項目数として示せば、H(生殖泌尿器関連)、D(消化器関連)、F(皮膚関連)、M(不適関連)がそれぞれ2項目、A, B, E, L, P, Qが各1項目である。

2年課程では、1-2間で8項目（B2, D1, F1, H1, I1, O1, P1）、2-2+間で6項目（F3, B1, M1, Q1）に差が示された。1-2+間では8項目（B2, M2, D1, J1, K1, L1）の合計22項目で差が示された。合計3グループ間比較で2比較以上でともに差が示されたのは、「B.ときどきひどい鼻出血がある」「M.いつもそばに相談相手が欲しい」の2項目であった。分類毎の項目数で分けると、B(呼吸器関連)とF(皮膚関連)がそれぞれ4項目、D(消化器関連)とM(不適関連)が2項目、H, I, J, K, L, O, P, Qがそれぞれ1項目であった。

また差の示された比較の増減の方向について述べると、多重比較では一般に減少するケースが多く、3年課程では21比較中15、2年課程では22比較中15が減少による差であった。増加によって有意差が示される項目を比較学年を付して示すと次のとおりである。3年課程では「D.よく胃をこわす1-3+」「D.食後よくげっぷがでる2-3」「H.月経が不順である1-2, 1-3+」「L.毎日くつろぐ余裕がない1-3」「人の言動が気に障ることがよくある1-3」の項目が増加を示した。また2年課程では、「D.胃・十二指腸潰瘍にかかったことがある1-

2+」「H.急に体がかあっとなって汗がでたりする1-2」「I.仕事で疲れきってしまう1-2」「J.いつも体の具合が悪いほうだ1-2+」「L.毎日くつろぐ余裕がない1-2+」「P.いつもくよくよする」「P.感情を害しやすい1-2」の項目が増加を示した。

3年課程と2年課程における学年比較で、1比較以上とともに差が示された項目は「D.食後よくげっぷがでる」「L.毎日くつろぐ余裕がない」「M.いつも決心がつかない」「M.いつもそばに相談相手が欲しい」の4項目のみであり、この中で増減の方向まで一致した項目は、「L.毎日くつろぐ余裕がない」がともに増加、「M.いつも決心がつかない」「M.いつもそばに相談相手が欲しい」がともに減少を示した。

しかし学年進行に伴って回答割合が単調に減少、あるいは増加を示した項目はそう多いわけではなく、通常は増減を繰り返す、その中における高低差の大きいものが有意差を示した場合が示された場合が多かった。表5中の項目で、学年進行にしたがって割合がほぼ単調減少を示したのは、3年課程で項目番号4, 74, 154, 192, 2年課程で4, 14, 15, 74, 130, 153, 154, 191であり、単調増加を示したのは、3年課程で48, 97a, 2年課程で56, 117, 140のみであった。

考 察

まず授業との関わりに関することであるが、最初に授業時間割について述べておきたい。学年進行に伴う健康状況等の大きな変化は、学業による影響と2, 3年間における加齢に伴う影響、その他の生活要因による影響などが考えられる。そこでまず対象とした公立短期大学における学年進行に伴う講義や実習時間数について表6に示した。臨床実習が先に述べた期間に集中することは同表から明示される。また3年課程で2年後期に講義演習が集中すること、さら

表6 課程別授業時間数

| 授 業 学 年 | | 3 年 課 程 | | | 2 年 課 程 | | |
|------------|----|---------|--------|------|---------|--------|------|
| | | 必修講義演習 | 選択講義演習 | 実技実習 | 必修講義演習 | 選択講義演習 | 実技実習 |
| 1年 | 前期 | 330 | 120 | 60 | 465 | 120 | 30 |
| | 後期 | 435 | 60 | 90 | 435 | 150 | 15 |
| 2年 | 前期 | 420 | 75 | 30 | 465 | 135 | |
| | 後期 | 405 | 210 | 45 | | 30 | 720 |
| 3年 | 前期 | | | 630 | | | |
| | 後期 | | 30 | 630 | | | |

に3年課程に比して2年課程ではすべての学年・学期で授業時間数が多いことが示される。これを前提にこれ以降の検討を加えることとする。

まず入学直後と臨床実習後期の健康状況を比較して、後者の方が一般に愁訴が減少することが示された(表4-1, 2)。愁訴項目数の減少と、一部項目を除き愁訴のほとんどの項目で回答割合の減少とが示された。臨床実習や授業などによるストレスよりも、大学生になったことによる生活の変化によるストレス、あるいは親元を離れて初めて一人暮らしをすることによるストレスなどが入学当初に増大したのではないかと考えることができるが、このことは高校生の時期からの変化を追跡しなければ明示することはできない。愁訴回答割合の学年進行に伴う全般的減少は、大学生生活への適応あるいは加齢による生活への順応へ向かう過程と考えてよい可能性もあるが、「よく胃をこわす」、「月経が不順である」や「月経時に緊張したり神経質になる」、「疲れてよくぐったりする」という4つの質問のみに回答割合の増加が示されたことは、内容からいっても新たなストレスを生じた可能性が示唆される。

クラスカル・ウォリスの検定によれば、学年進行に伴う回答割合の変化に統計的有意差が示された7項目は、3年課程と2年課程では該当項目が全く異なったという事実、さらに多重比較で何らかの差が示された32項目中、3年課程と2年課程で共通する該当項目は5項目しかないという事実は、3年課程と2年課程の学生の愁訴に関係する経過が異なる要因みよるものであることを示すものであろう。同じ年代の加齢による影響ではないことは明らかである。

また多重比較によれば、学年進行による有意差が示された項目数が、3年課程においてより2年課程で多いということは、2年課程の学生に3年課程における健康上の変化が生じていると考えられ、学業からの影響も含めた加齢以外の影響要因を検討せざるをえない。両課程の生活上の相違要因として、2年課程の方が県内出身者の割合がすべてのグループで多い、したがって自宅通学者が多いことがあげられるが、このほかに両者の差に及ぼす生活上の影響要因が考えられないため、学業上の影響によるところが最も大であると考えることが妥当であろう。

また3年課程と2年課程で共通して有意差の示された項目もあり、両課程の学年比較で1比較以上ともに差が示された項目は「D.食後よくげっぷがでる」「L.毎日くつろぐ余裕がない」「M.いつも決心がつかない」「M.いつもそばに相談相手が欲しい」の4項目のみであり、これらは学年進行とともに共通して差を生じさせた項目である。しかしこの中で増減の方向まで一致した項目は、「L.毎日くつろぐ余裕がない」がともに増加、「M.いつも決心がつかない」「M.いつもそばに相談相手が欲しい」がともに減少を示し、残る項目は方向が異なった。したがって学年進行に伴って共通に健康状況に影響する要因があり、両課程の学業の差からそれぞれの課程の学生に独自に影響する要因があることも確実であろう。表5に示すことができなかったが、いずれかの検定で有意差を示し、学年進行に伴って単調増加を示した項目は、3年課程で「D.よく胃をこわす」、「H.月経が不順である」、2年課程で「胃・十二指腸潰瘍にかかったことがある」、「J.いつも体の具合が悪い方だ」、「L.毎日くつろぐ余裕がない」であり、

ここでも両課程で項目に違いがあった。このほかの項目では増減を繰り返す、あるいはどれか1つの調査時期で反対方向へと変化したなどの動きを示した。全般的に回答割合は減少方向であった項目が多かったこと、多重比較でも1年次と他の学年との比較で差を示す項目が多かったことなどを考え合わせると、学年間で均衡のとれた看護教育のカリキュラムを検討すべきであろう。臨床実習時期に向かつてのストレスの増加は本研究では少数の項目で示されたのみであったが、学業一般によるストレスと考えられる方向への変化を示す項目は確かに存在することが示された。またそれらは単純に増加・減少するものでなく、課程毎に独自の経過をとりながらその時期に応じて変化することが示された。

ま と め

公立短期大学における看護学生に関して、修正 CMI 調査票を用いて、3年課程・2年課程それぞれ3期にわたる健康状況を、入学時から卒業前（臨床実習後期）まで追跡調査した。健康調査で示された愁訴回答の割合は、学年進行に伴って減少することが多く、入学時に一時的にストレスがかかった可能性も示唆された。しかし一部の項目では時期的に上昇、あるいは学年進行につれて上昇する項目も示された。これらは3年課程・2年課程で該当質問項目がほぼ異なることから、加齢によらない影響、特に学業の影響であることが強く示唆された。

文 献

- 1) 尾首睦美, 小児臨地実習における看護学生の不安要因に関する一考察, 九州大学医療技術短期大学部紀要, Vol. 26, p.51-p.57, (1999)
- 2) 上山健一・野間口光男ほか, CMI と UPI からみた学生の精神保健上の諸問題とその対策, 精神科治療学, 13 (3), p.289-296 (1998)
- 3) 門脇千恵・大平光子・松木悠紀雄, 女子看護短大生の愁訴について 修正 CMI の分析から, 日本看護学会24回集録 看護教育, p. 8-11 (1993)
- 4) 坂井明美・田淵紀子ほか, 助産婦学生の人格傾向と時期による変容 CMI・TEG・SDS の質問紙法を用いて, 母性衛生, 34 (2), p.251-257 (1993)
- 5) 松崎俊哉・木暮ミカほか, CMI 健康調査表による口臭症患者の観察, 日本歯科心身医学会雑誌, 13 (1), p.13-23 (1998)
- 6) 永井道夫・足立裕康ほか, 歯科治療時に異常絞扼反射を生じる患者について CMI による研究, 歯科と麻酔, 8 (1), p. 3-6 (1994)
- 7) 玉田太郎, 思春期の不定愁訴 不定愁訴の概念と CMI による調査, 産婦人科治療, 77 (1), p.38-41

(1998)

- 8) 金野滋・小林紀子ほか, 医歯系大学生の自己評価抑うつ尺度と CMI 留年・退学との関係, 全国大学保健管理研究集会35回報告書, p. 285-288 (1997)
- 9) 秋岡勝哉・松永喬, 高齢者のめまい患者の心理テスト成績, *Equilibrium Research*, 53 (3), p. 422-428 (1994)
- 10) 犬飼賢也・関聡ほか, めまい患者における心理テストの検討, *日本耳鼻咽喉科学会会報*, 101 (12), p. 1397-1405 (1998)
- 11) 飯森洋史・村上正人, 小児精神・心理学的検査の実際 CMI による評価, *小児内科*, 26 (6), p. 968-974 (1994)
- 12) 勝沼晴雄ほか編, 公衆衛生・集団検診法, 医歯薬出版, p. 23-38 (1960)